
音楽家と武器職人の人間緋弾

なちす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽家と武器職人の人間緋弾

【NZコード】

N1138BA

【作者名】

なちす

【あらすじ】

人間シリーズと緋弾のアリアのクロスものです。馴文です。処女作です。読んでくれたら嬉しいです。

「いやあ。話しの解る人でよかつたよ。

男は「ヤ一ヤ笑したがる男をみた

○四時之氣也。一則以時，二則以地。

こんなに話の解る人は君……零崎双識、君だけだ

卷之三

二十一人目の地獄

自杀志愿者

卷之二十一

「……のか……」さながら聞けば一人の女がいた。

双蹠は男に言う。すると男は盛大に笑いながら言った。

卷之三

て君以外いないよ！他の人は0・000000000000000

卷之三

考えるんだ！本当に困るよ！僕は純粋な人と話したいのに・・・。

これが理由か。不用力かな？」男は「ヤ一ヤ笑ひながら言つた

すると男はズイツと顔を近づけて

「さあ！言つてくれ！君の願い事を！」

男は双識に迫つた

「・・・」

双識は考えた。

自分を生き返らせるのは考えていない。そしたら自分以外の零崎を転生、もしくはトリップさせようとは考えてみたが、やはり皆がちゃんと寿命で死ねるよう願つた方がいいだろう。

そう考へていると男は

「そういえば言い忘れてたよ。今君の家族はほとんど殺されているけど今死にかけている人がいたよ。確か名前は・・・。

零崎 曲識さん

だよ。」

男は思い出したかのように言つて映像をだした。そこにはもう死んでもおかしくない状態の曲識が横たわっていた。

双識は決めた。

「聞いていいかい？」

「なんだい？」男は真剣な顔になつた双識を見ながら言つた。

「人識に軋識は生きてるかい？」

男はニヤニヤ笑いながら

「生きてるよ。伊織ちゃんも。」

そつ言うと双識はホッとした、顔を少ししたらすぐに真剣な顔になつた。

「願い事を聞いてくれるかい？」

男はもちろん…とニヤニヤ笑いながら言った。

「それはね・・・」

・・・。

双識は心配なせいがソワソワとしていた。それを見て男はニヤニヤ笑いながら

「大丈夫！ちゃんと曲識さんの怪我を治してくれる人がいる世界で、彼の力を充分に發揮出来る世界に送ったから。オマケも付けたしね！神を信じなさい！」

神はニヤニヤ笑いながら言った。そして

「ねえ。もつと語ろう！そうだな・・・君の話をしてよー。」

神はワクワクしながら聞いてきた。

「うふふ。いいでしょう。さあて・・・何から語ろうか・・・。」
トキ・・・。生きてくれ・・・。そして人生を楽しんでくれ・・・。
そして双識は語りだした。なにもない空間に一人の話し声だけが響き渡り続けた。

第一話（前書き）

誤字がありましたら教えてください。感想まつてます。

第一話

私はあるバーに来ていた。私は彼から貰つた合鍵を使ってバーの中に入る。中はホコリがかつていて全然掃除されていないフロアにテーブル・椅子が見えた。

椅子が見えた。

だがやはり田に映るのはステージの上にあるピアノだつた。ピアノの置いてある所だけとて寂しく感じた。ピアノは彼を待つてゐるだろう。

二〇四

たが、彼はもうしない、しないのだが、理由は幾つかある。

一ノ瀬は死んでしまひうらう。

「嗚呼・・・・・また曲識君の音楽を聴きたかつた。」

零崎曲識

零崎一賊の中では異端な存在である。ある出来事がある前は普通の殺人鬼だつたがあれ以降少女しか殺さないと誓つた男。^{ベジタリアン} 戦争には介入しないことから『逃げの曲譯』と呼ばれたり『菜食主義者』とも呼ばれ、『少女趣味』^{ボルトキープ}とも呼ばれた男。

彼は自分の店『クラシックラシック』というピアノバーを経営していく私はその彼の奏でる音楽のファンである。

あれは役立つていただろうか？

彼が望んだ武器。製作に一日もかかってしまった武器。あれは頑丈だから壊れることはないがチューニングが必要だ。だが

使い手が死んでしまったら意味がない代物ですかね。」

「真っ白?」

普通は風景が見える。にも関わらず扉の向こうは

卷之三

白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
ただ、白だつた。

「出口は此処しかありませんから行ってみましょうか。」
この時私は、罪口積雪は予感していた。また彼に会えると・・・。
私は白に入った。

時は遡る

悪くない。僕は満足だつた。漸く思い人に会えたから。最後に思い人に会えたから。思い人に歌を、最後の歌を聞かせることが出来たから。満足だつた。零崎曲識は満たされている。後悔なんてない。零に等しい。僕の友人罪口積雪には感謝仕切れない程の恩を作つてしまつた。

罪口積雪

『呪い名』序列一位・『罪口』

罪口商会

平たく言えば武器職人

そんな彼が作つてくれた武器があつたからこそ彼女に歌を届けることが出来た。恩を返せないのは残念だが悪くない。悪くない。いい。死んでも構わない。そう思つていると「なんでこんな所に死にかけた人がいるんだ?」こつちは気絶してゐし・・・。あー。仕方ない。仕方ないんだ。こんな見たら意地でも治したくなるのは当たり前だ。当たり前なんだ。感謝しろよ?本当に。」
その声を聞き終えた後僕は意識がなくなつた。

俺は夏休み救護科の単位を余裕を持って取るため単位の高い仕事をし終えて衛星学部から出ようとしていた。

すると目の前に人が一人倒れていた。一人が燕尾服を着ていて両手にはマラカスを持つていて酷い怪我をしている人と浴衣を着ていて腕には浴衣に似合わない黒い手袋をしている人だ。どちらも俺と同年代だった。「なんでこんな所に死にかけた人がいるんだ?こつちは氣絶してるし・・・。あー。仕方ない。仕方ないんだ。こんなのが見たら意地でも治したくなるのは当たり前だ。当たり前なんだ。感謝しろよ?本当に。」

重い病気や怪我を見ると治してしまいたくなるもので俺にどうしろと言われてもどうにも出来ずにして。そのせいでSランクになってしまった。本当ならRランク並だがそんなに目立たたくないためSランクで止めてもらっている。

「さて!おーい!そこの人達手伝つて!急患だ!急いでマスターズに連絡して!担架も持ってきて!ほら急ぐ!早くしないと死んじゃうよ!まあ、俺が一世一代の奇跡の手術で治すんだけどね!それにしても何処の変人だ?本当に・・・。」俺は、健康院登は大きな声で応急処置をしながら言った。

この時、彼は気づいてなかつた。ただの変人ではないことを。

設定

原作開始前の話し。遠山が東京武偵高校一年の「じる」の話しです。

人間シリーズより

零崎 曲識

ゼロザキ マガシキ

神と仲良くなつた双識が曲識が死にかけていると聞き願い事を使って怪我を治せる人がいる世界に送つた。神からのオマケで武偵高校に入れる歳まで若返らせた。

罪口 積雪

ツミグチ ツミコキ

神からのオマケ。曲識同様若返らせた。神様いわく一人より一人だそうだ。

緋弾のアリア

等はウイキペディアを参照にしてください。

オリキヤラより

健康院 登

ケンコウイン ノボル

東京武偵高校の衛生学部救護科の一年生でありながらSランク。本当ならRランク並の実力を持つが目立たたくないためSランクで止めもらっている。

酷い怪我や病氣を見ると死にかけた人でさえ治してしまいたくなる性格。

最近の悩みはイ・ウーから勧誘が何回も来て困っている。

オリキヤラ大募集！

こんなオリキヤラ欲しいと言う人はドシドシ申し付けください！

設定（後書き）

作者の指が壊れる危険性があるため詳細はウィキペディア参照してください。

次回

罪口さんが本領発揮します。

感想・オリキャラまつてます。

第一話（前書き）

嘘言いました。すみません m(—)m
アドバイスや感想、誤字・脱字ありましたら書いてくれたら嬉しい
です。
では・・・。

第一話

私は、罪口積雪は目を覚ました。そこは白い世界ではなく天井が見えた。

「ここはどこでしようか？」

起き上がり辺りを見回した。私は驚いたそして自然と笑みがこぼれた。そう、隣のベットには

「嗚呼・・・。また君の音楽を聽けれるんですね。曲識君。」
ぐつすりと眠っている曲識の姿が映つたからだ。

だが、彼の身体は若返つており髪の毛も前までは腰以上に長かつたが今では腰以下の長さになつていて。そして身体には包帯が巻かれている。

「気が付いたようだな。」ガラガラと音をたてて一人の男が入ってきた。

「俺は健康院登。そこの燕尾服の人を治療した武偵だ。」

彼はそう言いながらベットの近くにある椅子に座った。
武偵・・・。

聞いた事がない。とりあえず自己紹介をしなくては・・・。

「私は罪口積雪。彼は零崎曲識君です。」

彼はとんでもない事を言つた。

「失礼だけど、変な名字に名前だな・・・。別の世界からきた人間か？」

言い返せない。そもそも私達のいた世界には武偵なんていない。だから私は決めた。

「どうやらその通りみたいです。武偵なんて聞いた事がありません。」

そう言つと彼の顔が驚きの表情と化した。

「えつ！？マジッ！？冗談で言つたらマジ話し！？嘘だろ・・・。

占いに『今週の貴方は遠いところから来た一人を助ける事になるで

しょう。その一人は必ず貴方の盾となり、剣となるでしょう。』と
出たがまさかまあまあ当たるとは・・・。」

本当にまあまあである。

「待てよ？あんたら戸籍もないんじゃないかな？」

彼の言つている事は当然の疑問。だが別の世界から来たのなら無い
のは当たり前である。

「ありませんね。別の世界から来たのですから。」

彼は唸つていた。すると何か思い付いたよう二ヤリと笑いながら
聞いた。

「占い通りならあんたら何かしら得意な事あるだろ？」

と。

だが私は武偵がどんな事をするのか知らなかつた。故に・・・

「まずは武偵について一から教えて下さい。じゃないと私達の持つ
スキルを充分に發揮できるかどうか解りません。」

彼はしまつたというような顔をしてから

「了解。まあ武偵と言つのは・・・。」

一時間経過

「なら私達のスキルは充分に發揮出来ますね。」

私は装備科として。曲識君は尋問科として。

「よし！それを使って教務科の人々に武偵高校の生徒になれるよう頼
もう。まあ、俺がちゃんと仕事をすることも条件に入れれば問題な
いだろう。」

もの凄く不安になつたが今はそうしないと後は私達の素性を言わな
くてはならない。私は別に問題無いが曲識君は問題大有りだ。

「そろそろ。あんたらは何が得意なんだ？」

彼にだけ教えておこう。私達の素性を。だから先ずは自己紹介をし

よつ。

「改めて自己紹介しましょう。私は『呪い名』序列一位の『罪口』

罪口商会の罪口積雪です。そして彼は零崎曲識。

『殺し名』第三位の『零崎一賊』

生糀の殺人鬼集団の家の者であり

音楽家です。

第一話（後書き）

次回はそ罪口さん之力發揮です。

第二話（前書き）

黒口ちゃんのターン。

第三話

翌日

積雪と曲識のいる病室には健康院登と教務科の先生方で一杯になつていた。

「健康院から話しさ聞いた。力を貸す代わりに戸籍すら無いお前達を武偵高校の生徒にしろ・・・か・・・。その条件を呑むと思ったか?」

女の先生は睨みながら言った。すると健康院は

「綴先生。『イイツは本当にヤバイくらい凄いんだぜ。今年入つて來た一年生の平賀 文よりな。』

健康院は真剣な顔で先生方に言った。

「先生方。あのマラカスについて解つた事はありますか?」

「あの少年が持つていたマラカスかね?あれは装備科の先生や生徒に見せたが楽器だったよ。

「ただ。物凄く堅く、軽いとしか解らなかつたがね。」校長先生はそう言った。

「あれは楽器ではありませんよ。」

罪口は笑いながら言った。

「樂器意外に何があると言つんだ。」

「「武器です。」」

罪口と健康院は同時に言った。周りは『何を言つてゐんだ?』と言つよつな顔になつた。

「オイオイ先生。あれの堅さは知つてゐんだろ? 対戦車用の銃をゼロ距離で撃つても傷一つない代物なんだろ? 積雪?」

勝ち誇つたかのように話している健康院だが罪口は無視しながら。「ええ。アレを、『ボルトキープ(少女趣味)』を鈍器としても扱えますし、曲識君クラスの音楽家なら音階をちゃんと表現できるよう設計します。」

「ほひ。自分が作つたとでも言いたげだな。」先生方は頷いて『あんな物作れる訳がない。』や『音階なんて表現出来っこない。』と言つている先生が大半だったが校長先生だけが違つた。

「罪口君だつたかな?」

「はい。」

何を言われるのか罪口は少し身構えた。

「君が本当にあのマラカスを作つたのならこの銃の説明を詳しく言いながら解体し元の状態に戻してみてくれないかね。」

校長先生は綴先生が持つてゐる『グロック18』を貸して貰いそう

『言いながら私に渡した。

「 「 「 「 校長ー!? 」 」 」

先生方はビックリしていた。

無理もない。銃なんか渡したら発砲する恐れがある。しかし校長は銃を渡した。誰がビックリしないか聞きたいくらいだった。『グロック18』を手にした罪口は

「『グロック18』ですか。これは・・・」

校長先生でさえも驚きを隠せなかつた。

「『グロック18』ですか。」と呟つてゐる時^点で工具も無しに解体して綺麗に並べられていた。

「登君。拭くものをくれないかい?」

罪口は説明の最中にそんな注文を言いながらページを丹念に見ていた。

「ほこよ。」

健康院は罪口に拭くものと工具を持ってきた。

「有難いわ! やります。ですが、工具はいりませんよ。」

罪口は一つ一つ丹念に・早く拭いていき

「出来ましたよ。本當なら対価を頂きたいのですが今回はこいでもう。」

罪口は銃を返した。銃は前よりも綺麗になつており、使い手のやつやすいようにセッティングをされたあつた。

「あ・・・ああ。」

認めることじか出来ない。コイツなら絶対に作りてしまつ。誰もがそう思つた。

「因みに、あのマラカス『ボルトキープ』を作るのに掛かった時間は？」

男の先生がそう聞くと

「いやあ。アレを作るには本当に苦労しましたよ。一口も掛かってしまいましたが。」

聞いていた皆は口をあんぐりと開けてしまった。

アレを一口ー？

誰もがやつ思つていると疑問に思つ事が一つ浮上した。

アレを使ってビンヤツで闘つのかと。

「私の力は解つて頂けましたか？後は曲識君の力も見せてあげたいんですが、まだ彼は寝ています。また口を改めたほうがいいかと思いますが？」

と罪口は言つと男の先生は銃を構えてきた。

「てめえ・・・本当に何者だ?」

「蘭豹先生!」

健康院は叫んだ。先生方も止めようとした時

「銃を下ろせ。」

と誰が言つと欄豹は驚きながらも銃を下ろした。否、下ろされた。

「悪くない。」いつこいつ田覚めも・・・

「悪くない。」

隣のベットには田覚めた曲識の姿があった。

第三話（後書き）

次回は曲識さんのターン！
感想・アドバイスまつてます。

第四話（前書き）

曲譜のターン！

第四話

先生方には帰つてもらつた。
つもる話もあるだらうから次の日にまた来る。
だそうだ。

「なるほど。別の世界か。悪くない。」

曲識は全く混乱することなく、話しを受け入れた。

「元の世界は恋しくないのかい？」

と健康院が聞くと曲識は

「もうあそこには未練はない。それに今を生き抜くためにはまず武
偵高校の生徒にならなくてはならないんだらう？」「

「ああ。明日あんたにやつてもらうのは
綴先生が武偵高の生徒を一人連れて来る。

その一人は前もつて先生からお前の武器であるマラカス『ボルトキ
ープ』をそれぞれ隠してもらう。今やつてるんじゃないかな？

俺が治療したんだから明日には退院できるから、あんたは一人から
マラカスの在りかを吐かせる。

そして探しに行く。

探しに行く最中、邪魔してくる者がいるみたいだ。
因みに、尋問は今いるこの病室で尋問してもらう。

先生方は隠しカメラや防犯カメラでちゃんと監視してゐるから。
開始時刻は朝の九時から終了時間は夜の九時。
隠してもいい範囲はこの東京武偵高校がある人口浮島全部だ。

簡単に言えば十一時間かけて尋問し、武器の在りかを吐かせて南北およそ一キロメートル・東西五百メートルの範囲の何処かにある自分の武器を制限時間内にとり返せばいい。」

もつと簡単に言ひと
制限時間内に武器を取り返せ！
だ。

「悪くない。だが聞きたい事がある。」

曲識は健康院の顔を見ながら言った。

「僕は手ぶらでそれに臨めばいいのか？」

健康院は大笑いしながら返答する。

「あんた自体武器だらうが。困るとこあるか？あと人は殺すなよ
？」

それを聞き曲識と罪口も笑つた。

「いや。悪くない。そういう零崎を始めるのも、悪くない。」

そして曲識は

「準備したい物がある。今から言つ物を持ってきてくれ。」

二人は真剣な顔になり話しを聞いた。

一方

先生方はといふと、
一学年の生徒を全員呼び出しその旨を伝え行動をしていた。こんな
試験は尋問して場所さえ解れば合格にしようと考えいた。この時は
一学年の生徒も先生方も想像してなかつた。こんなにアッサリと終
わつてしまつとは・・・誰も予想していなかつた。

翌朝九時。

病室には遠山　金次と峰　理子・椅子に座つてゐる燕尾服を着た曲
識の姿があつた。

内心、金次と理子は変人だと思っていたがこついう類いは何かある
と考え警戒していた。

「僕の名前は零崎曲識。音楽家だ。」

急に名乗り出してきたため戸惑いながらも挨拶した。

「そりか。金次と理子か・・・。」

曲識はユラリと立ち上がり一人は身構えた。

が

「素晴らしい名前じゃないか。」

二人はポカンとした。

監視している先生方も盗聴器を使ってそれを聞くと皆ズルツとこけた。

罪口と健康院だけ笑っていた。

「悪くない。そんな君達には昨日録音した歌を聴いて欲しい。僕は音楽家だ。人に音楽を聴かせてその感想を聴いてもらいたいという理由もある。」

「えっと……？」

二人はまだ混乱していた。無理もない。こんな尋問ではない。自己紹介だ。

「君達を尋問しても絶対に嘘しか付かないだろう？悪くない。だから親密な関係になるためにも話をして教えてもらおうと思つたんだ。今から流す曲はBGMだと思って聴いてくれ。」曲識はカセットテープを懐から出し曲を流した

ハズだつた。

「おや？おかしいな？ちゃんと歌つたのに録音されてない・・・」

二人も先生方も思いつきりこけた。
が、曲識は無表情で

「悪くない。仕方ないが世間話しどもしていよう。」

そして三人は世間話しを始めた。

「おい。健康院。奴の何処が凄いんだ？」

綴先生の顔にはムカつきマークが一杯あつた。

「慌てんなよ綴先生。」「そうですよ。」

健康院と罪口は笑いながら言つた。

「「もう力を使ってますよ？曲識（君）は。」」

先生方は『ハア？』と言つたが

『それじゃあ、僕の質問に答える。武器はどこにある？』

状況が一変した。

曲識は武器が隠されている範囲がかかっている地図を広げベットの上に置くと二人は地図のある場所を指差した。武偵高校内部の強襲科の射撃場を金次が指差し、超能力捜査研究科を理子が指差した。

「身体が勝手に！？」

「え？！？何で！？」

二人は混乱した。

「ふむ。悪くない。ありがとう。君達が協力してくれたおかげで武器の在りかがわかった。君達はゆっくりスクワット百回やつてくれ。」

すると二人はゆっくりスクワットをやりはじめたのだ！

先生方も驚いたが蘭豹だけが

「これだ！あの時のだ！あいつ身体を操つてやがるんだ！」

他の先生方は驚愕した。

罪口は微笑み、健康院は興味深そうにモニターを眺めていると曲識はモニターに映している監視カメラを見て言った。

「いひいつた零崎を始めるのも、悪くない。」

第四話（後書き）

次回も曲譜のターン！

感想・アドバイス待つてます！

第五話（前書き）

うーん。 駄文。

第五話

「理子……。

あいつ……何……したか……解る……か……？」

「私も……解ら……ない。」

金次と理子は仲良く病室でユックリとスクワットをやっていた。
いや。
やらせていた。

「まさか……超能力……か……？」

と言ったものの何時やつたのか解らない。

「こつはとてもマズイ！
皆に知らせないと……。

と思つても

「スクワット……が……止まら……ないから……携帯を……
・取ることが……でき……ない……（汗）」

後……何回だ？

そう絶望しながら皆の無事を祈つた。

カセットテープはまだ音楽を流しつぱなしになつてゐ事に、まだ一人は氣付いてなかつた。

「いい天気だ。悪くない。」

病院から出た元殺人鬼・零崎曲識は空を見上げていた。

カモメ達の鳴き声と波の音、人の声など沢山耳に入つてくる。

「それにしても、邪魔をしてくるか……。

悪くない。

少し試したい事もあるからな……。」

曲識は彼女が言つた事を思い出す。

あれは、彼女と一緒に機械で出来たメイドロボ・由比ヶ浜ふに子を倒したときのことだ。

「てめーも随分と大声でシャウトしてたよな。

ロックンロールかよ。

案外、あの声の衝撃波だけでも武器になつたりすんじゃねーの?」「・・・無理だな。

そういうタイプの音使いもいると聞くが・・・僕は残念ながら、

そういう音の使い方が不得手だ。

僕の専門は音を支配することです
音を解放することではない

「ああ?何決め付けてんだよ、ばーか」

「それが両方できたら、最高に格好いいだろうが。

つーか、それができたらふに子はてめーひとりで倒せたんだ。

不得手だと専門じやないとか、言い訳してんじやねーぞ。

生きてんだから、頑張れよ。

つーか、死んでも頑張れ。

あたしは頑張つたぞ

・・・。

あの時を思い出すと笑ってしまつ。実際頑張つたら出せるよつこなつたから。そして、僕は大量に息を吸つて超音波を出した。

数は・・・ツ！？

「悪くない。

僕の超音波に気付く人が一人いるとはな・・・。

悪くない。」

どうやら彼らから聞いた通り、ちゃんとそこには武器があるよつだ。
その周囲に人が沢山待ち構えている事も、

勿論、

超音波に気付いた放送室にいる曲識の出した音を聞き漏らさず盗聴
している人と

学校の屋上でスナイパーごとに曲識を監視している人も解った。

曲識は路地裏に入った。

口笛を鳴らしながら

第五話（後書き）

手が痛い・・・。

次回も曲譜のターン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138ba/>

音楽家と武器職人の人間緋弾

2012年1月8日19時50分発行